

## E 7 II 家政学における学問のあり方についての一考察

— プラトンの「国家」篇をもとにして —

郡女大家政 ○高館作夫 関口富左 影山彌 真船均 工藤澄子 深谷笑子

目的 家政学における学問のあり方について、その本来の意味をプラトンの作品にもとずきながら考察する。

方法 文献研究、主としてプラトンの「国家」篇

結果 プラトンによれば、学問研究には自明な事柄に疑問を抱き、<sup>フラマツル</sup>驚きの感情をもつこと、さらに、この道一筋に生きるという孤独のなかの真剣さが、必要であるという。これらを駆使して得るのが知識<sup>ヒステプ</sup>である。知識は、(i)いわれた通りにあるという真実性、(ii)論換にもとずきながら、理論づけがなされていること、つまり、真実性と論理性の二つが要求されるものである。科学が「学」であるためには、このような知識が必要であり、そのことの故にめざましい文明の発達がなされてきた。しかし、他方、プラトンは科学の研究に内在する問題点を指摘している。まず第一に、目覚めた知的好奇心は止むところを知らない。絶えず結末へと探究は進む。一つの疑問を解くために始めた研究は、さらに多くの疑問を発見することになり、科学の分化、専門化が生じてくる。その結果、枝葉をしげらして根本を忘れる恐れが出てくる。それは科学の各分野がどう人間の生活に関わるべきかの反省がない。第二に、科学は、<sup>ヒニボテリス</sup>仮定、例えば、数とは何か、実験とは何か、などの本質的理解を求めない。基本的な本質の吟味をしないまま、いくら緻密な科学理論を展開しても、それは砂上の楼閣にすぎない。第三に、科学は事実を明らかにしても価値や意義を教えてくれない。以上がプラトンの指摘であるが、これは現在、家政学が直面している問題でもあり、関口らの説く学問論の必要を認めることができる。